

保育の交差点



教える中で教わる

上 沢 謙 二

教わるつもりでなければ教えることはできない。それも誰に教わるのではない、教えるものから教わるのだ。

教育は生きた相互作用だ。教えるものが教わり、教わるものから教えられる。この態度と気持がなければ、ほんとうの教育はできない。ことに生活を通じての性格教育である幼児保育においてしかりである。

四月——第一保育期が始まる。新しい子どもが続々とやってくる。

教育のはじめは、まず観察だといわれる。

それについては、先生はいろいろなことを考え、準備する。心理の研究とか、気質の分類とか、問答法とか、統計法

とか、それは重要だが、いずれもこちらの計画を当てはめる行きかたである。一定の型によって判別しようとする方法である。こちらが主である。

けれども、観察とは相手を知ること、自分を知ることではない。相手が主である。相手のうごき、傾き、はたらきを、ありのままに知ることである。「ありのまま」とは、なるべく他の要素を入れないことである。だから、この場合の観察には、こちらの考えで取り扱うというのと同時に、取り扱うその相手から教わるという素直な柔軟な態度と心持が必要である。だから、観察するということの半面は、教わるつもりでなければならないということになる。

ところが、先生とは子どもを教えるための先生だ。その先

生がその子どもに出遇ったはじめから、いきなり教わるとは思えないし、教わろうとも思わないのが普通だろう。それでまずこちらからはたらきかけることばかりするようになるのも自然だろう。

しかしこの二つの態度と心持をくらべると、後者より前者のほうが、より多く真相にふれることができると思われる。この意味において「保育はまず教える子どもから教わるることによってはじまる」ともいえるだろう。

「先生、あの犬、どうした？」

お庭であそんでいる時、三、四人の子どもに、突然きかれて、先生はなんのことかわからなかった。

「犬？ 犬がどうかしたの？」

ききかえすと、子どもたちはどっと笑ったので、先生はすこし照れくさくなった。

「犬って……なんですか？」

子どもたちは今度は真顔まがほになっていった。

「先生、おはなししたじゃないの。あの犬よ、ベスよ。どうしたの？」

いわれて、はっとした。

そうだ、五、六日前、おかあさんにはぐれた女の子が、やっといきあったお話しをした。その女の子がひとりになった時、いっしょにいた犬がベスだった。「おかあさんと順子ちゃん（女の子の名）はまたいっしょになって、仕合せに暮しましたとさ」と結んだが、ベスについては別になにもいわなかった。それが子どもたちの気になったのである。そうしてものたりないとも、心配とも、不満ともいいようのない気持になって、それが高じて、とうとう先生にきかなければいられないようにまでなったのである。

「ああ、そうだったか？」

気がついた先生は、ちょっと面くらったが「そう、そう」といった。

「そうよ、あの犬ね、ベスね、おかあさんと、順子ちゃんと、いっしょに仲よく暮したのよ。先生、いうの忘れたの？」

「そう」と、女の子はいった。「そうか」と、男の子はいった。

そうして、いかにもそれで安心した、満足したというような容子になって「さあ、いこう」と、手をつないで、すべり台のほうへかかだしていった。

そのうしろ姿を見送った先生は、心の中でいった。

「お話にはまとまりをつけなければならぬといわれるが……」

ほんとうにそうだ。うっかりしてはならないと、改めて教えられた」

思わずほっと溜息が出た。

アメリカのニューヨーク教育実験局付属保育学校のミッチェル女史は、幼児の口から出る意味のないようなことを、丹念に書きとめておいた。

たとえば、一年十か月の子どものことば。

「牛さん、どこにいる。ろばさん、どこにいる。ちいちゃいアーちゃん、どこにいる。牛さん、いっちゃった。ろばさん、いっちゃった。ちいちゃいアーちゃん、いっちゃった。牛さん、すき。ろばさん、すき。ちいちゃいアーちゃん、すき。牛さん、きてよう。ろばさん、きてよう。ちいちゃいアーちゃん、きてよう」。

二才児のことば。「チックタック、マーニ（じぶんのこと）の鼻。チックタック、マーニの目。チックタック、マーニの口。チックタック、マーニの歯。チックタック、マーニのあご。チックタック、マーニの服。チックタック、マーニの靴下。チックタック、マーニの靴」。

三才児のことば。「それから、おとうさんはね、下へ、下

へ、穴の中へおりていった。それから、ブルドッグはね、上へ、上へ、空の上へのぼっていった。それから、おとうさんはね、下へ、下へ、おりていった。それから、ブルドッグはね、上へ、上へ、のぼっていった。それから、下へ、下へ。それから、上へ、上へ。それから、下へいって、上へいって。それから、上へ、下へ。下へ、上へ——」（歌のようになって、いつまでもつづく）。

なんのためにこういうことをするかといえば、幼児たちから教わるためである。そうして実際、女史はこういうことばから、いろいろなことを教わった。女史独特の「いまことばなし集」(Here and Now Story Book)は、こういうことばに導かれて、それをもとにしてつくられたものが多い。

その中のあるお話について、女史は「二才の子どもの心に、ある経験を活かそうとする時、誰もが用いられるようなお話の見本がここにある」といっているが、ある経験をお話の中に活かすことができるのは、子どものことばによって教わったおかげにはかならないだろう。

けれども、それはけっしてお話ばかりではない。こういう一つのことばは種々な方面に参考になり、さまざまな場合に活用されて、思い及ばない役割と効果をもたらすのである。

更にそれにとどまらない。

保育者といえども、一年三百六十五日、日々これ好日というわけにはいかない。なんとなく物憂いことも、心配ごとがある日も、いらいらする時もあるだろう。しかし、だからといって休むわけにはいかない。それで、足は進まないながらも幼稚園の門をくぐる。

やがて園児があつまってくる。いつものここにこした顔だ、無邪気な容子だ、活発な挙動だ。その「にこにこ」と「無邪気」と「活発」に取り囲まれると、おのずから額の皺もゆるんで、顔がほころびてくる。そうして「先生」と親しい声で呼びかけられると、思わず「はあい」と、返事がとびだしてくる。そうして「かあごめかごめ、かごの中の鳥は」と、手をつないで、いっしょにぐるぐる廻ってあそんでいると、物憂さも、心配も、いらいらも、いつか忘れられたようになってしまう。すくなくとも子どもとそうやっている間はそうなってしまう。それはそうならないこともあるだろう。そうなるには、あまりに深い憂い、重い心配を抱えていることもあるだろう。けれども、ふだん子どもをかわいがっている先生ならば、子どもの中に溶けこんでいる先生ならば、多少とも、胸が軽く

なったような、心が明るくなったような気持になるだろう。

もちろん、子どもたちがそうしようと思ったのでもないし、自分がそうなるうと思っただのでもない。けれどもそうなるのである。自然にそうならないではないのである。

こうなると、子どもから教わるという以上である。「教わる」というよりは「慰められる」「励まされる」「力づけられる」というような状態である。さりとて、冥加な先生ではないか。

教える中で教わるのがいかに多いか。毎日教えている中で教わっている。それが保育生活というものだ。

だから、子どもと生活していて、はっとすることがない、あつと気がつくことがない、ふつと目がさめたようなことがない先生は——すなわち子どもから教わった経験のない先生は、のんきか、遅鈍か、不熱心といわれても仕方がないだろう。

ほんとうに教えようとするものは、必ず教えるものから教わることを経験する。百世の教師である中国の孔夫子も、痛切にそう感じたにちがいない。曰く「教うるは習うの半ば」と。

（付記 ミッチェルの「いまこはなし集」を、はじめてわが国に紹介したのは波多野完治氏で、しかも本誌四十六巻第九号においてです。実は私も最初は氏から拝借して読んだのでした）